

経済・金融 フラッシュ

企業物価指数(2016年8月)

～前年比で下落幅縮小も、円高で下落基調は継続

経済研究部 研究員 岡 圭佑

TEL:03-3512-1835 E-mail: koka@nli-research.co.jp

1. 国内企業物価は前年比▲3.6%と下落幅を縮小

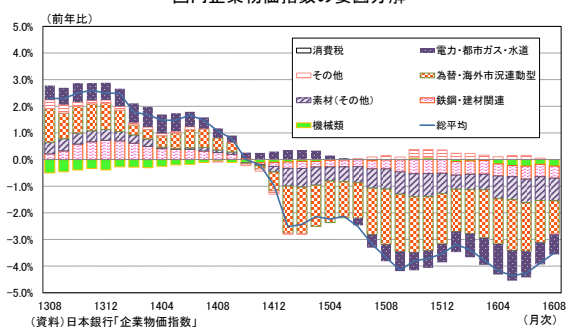
9月12日に日本銀行から発表された企業物価指数によると、2016年8月の国内企業物価は前年比▲3.6%（7月：同▲3.9%）と下落率は前月から0.3ポイント縮小したものの、事前の市場予想（QUICK集計：前年比▲3.4%）を下回った。前月比では▲0.3%（7月：同0.0%）となり、夏季電力料金引き上げの影響を除いたベースでは▲0.2%と3ヵ月連続でマイナスとなった。

国内企業物価^{注1}の前年比寄与度をみると、機械類（7月：前年比▲0.18%→8月：同▲0.25%）のマイナス寄与が前月から拡大したものの、為替・海外市況連動型（7月：前年比▲1.57%→8月：同▲1.23%）、電力・都市ガス・水道（7月：前年比▲0.82%→8月：同▲0.76%）、素材（その他）（7月：前年比▲0.90%→8月：同▲0.85%）のマイナス寄与が縮小したため、国内企業物価は前月から下げ幅を縮小した。

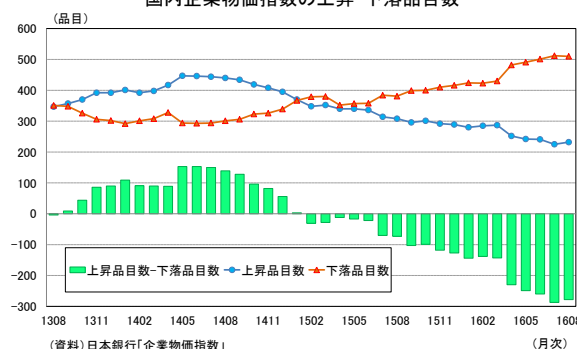
為替・海外市況連動型（7月：前年比▲17.7%→8月：同▲14.5%）は、依然大幅な下落を続けているものの、原油価格の持ち直しを反映して下落幅を縮小している。電力・都市ガス・水道（7月：前年比▲12.1%→8月：同▲11.3%）は、既往の原油安を反映した電力・都市ガスの燃料調整などから大幅な下落を続けているが、足もとの原油価格の持ち直しを主因に下げ幅を幾分縮小している。鉄鋼・建材関連（7月：前年比▲3.5%→8月：同▲3.4%）は、スクラップ類の持ち直しなどから、下げ幅は縮小傾向にある。その他（7月：前年比0.2%→8月：同▲0.1%）は、農林水産物の下落を反映してマイナスに転じている。

国内企業物価指数の調査対象品目814品目のうち、前年に比べ上昇したのは232品目、下落は510品目

国内企業物価指数の要因分解



国内企業物価指数の上昇・下落品目数



注1 1. 機械類：はん用機器、生産用機器、業務用機器、電子部品・デバイス、電気機器、情報通信機器、輸送用機器
2. 鉄鋼・建材関連：鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
3. 素材（その他）：化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
4. 為替・海外市況連動型：石油・石炭製品、非鉄金属
5. その他：食料品・飲料・たばこ・飼料、その他工業製品、農林水産物、鉱産物

となった。下落品目と上昇品目の差は278品目で7月の287品目から若干縮小したものの、品目数でみた価格の下落傾向が継続している。

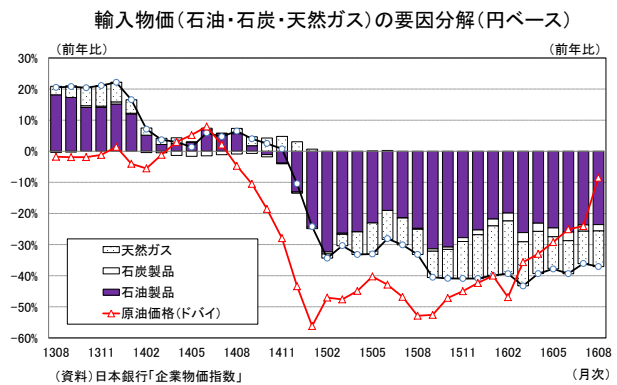
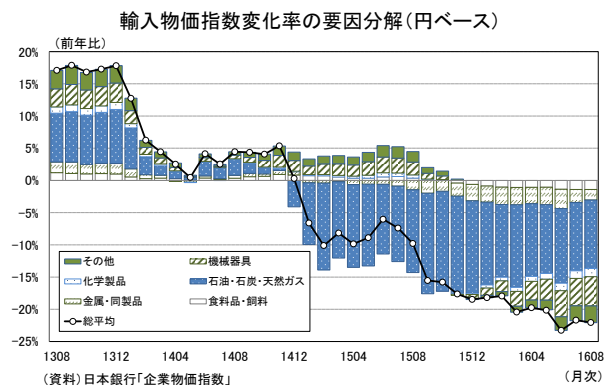
2. 輸入物価は円高で下落幅拡大

8月の輸入物価は、契約通貨ベース（7月：前年比▲10.9%→8月：同▲9.9%）では前月から下落幅を縮小したものの、円高の進行を受けて円ベース（7月：前年比▲21.7%→8月：同▲22.0%）では下落幅を拡大した。

輸入物価（円ベース）^{注2}の前年比寄与度をみると、金属・同製品（7月：前年比▲2.03%→8月：同▲1.64%）のマイナス寄与が前月から縮小する一方で、石油・石炭・液化天然ガス（7月：前年比▲10.61%→8月：同▲10.63%）、化学製品（7月：前年比▲1.19%→8月：同▲1.28%）、機械器具（7月：前年比▲4.25%→8月：同▲4.54%）のマイナス寄与が拡大したため、輸入物価（円ベース）は前月から下落幅を拡大した。

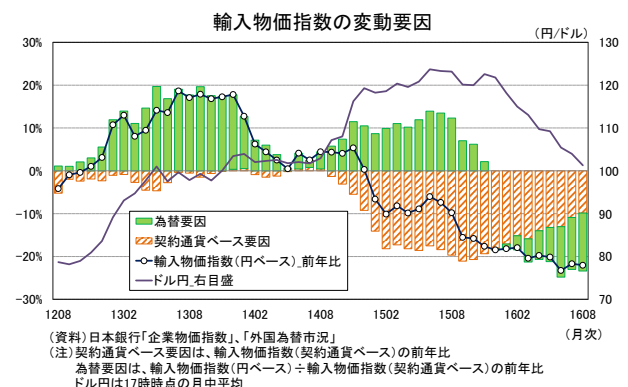
石油・石炭・液化天然ガスは、契約通貨ベースでの下落幅（7月：前年比▲25.9%→8月：同▲25.7%）が縮小傾向にある一方で、円ベース（7月：前年比▲36.1%→8月：同▲37.1%）では大幅な下落を続けている。これは、原油価格が緩やかに持ち直すなか、円高進行による下押し圧力が拡大したためと考えられる。先行きは原油価格の上昇が石油製品、液化天然ガスの下落を抑制することから、石油・石炭・天然ガスの下落幅は緩やかに縮小することが見込まれる。

金属・同製品は、円高の進行を主因に円ベース（7月：前年比▲20.8%→8月：同▲17.2%）での下落幅は大幅なマイナスを続けているものの、鉄鉱石や非鉄金属鉱の下げ止まりなどから契約通貨ベース（7月：前年比▲8.3%→8月：同▲2.2%）での下落幅は縮小傾向にある。



輸入物価（円ベース）の変化率を為替要因と契約通貨ベース要因に分解してみると、契約通貨ベース要因による物価下落圧力は弱まっているものの、為替要因による物価下落圧力が強まっているため、輸入物価は大幅な下落を続けている。

8月の為替レート（月中平均）は、1ドル=101.3円（7月：104.0円）と前年に比べ17.8%（7月：15.7%）の円高水準となった。その後、米国の利上げ観測、日銀の追加緩和期待の高まりを受けて、9月の為替レート（月中平均）は1ドル=102.8円（前



注2 1. 機械器具：はん用・生産用・業務用機器、電気・電子機器、輸送用機器
2. その他：繊維品、木材・同製品、その他産品・製品

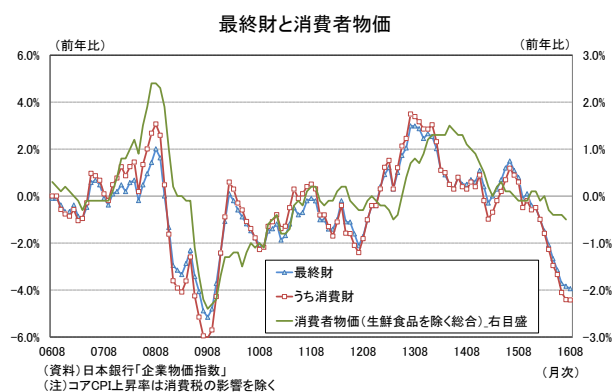
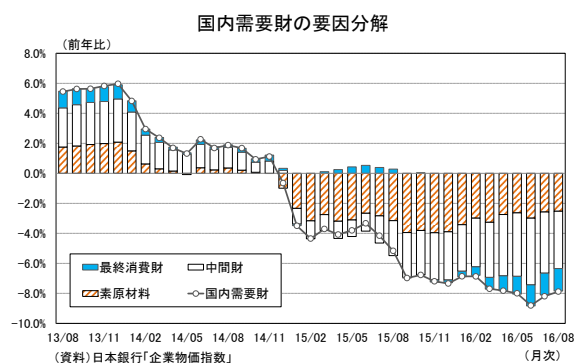
年比 14.4%の円高水準)と若干円安が進行している。

原油価格など国際商品市況の持ち直しによって輸入物価の下落圧力は緩和されている。しかし、為替レートは前年比で依然大幅な円高水準にあり、先行きも円ベースでの輸入物価の上昇を抑制するため、下落幅の縮小は緩やかなものとなるだろう。

3. 最終財への下押し圧力が続く

8月の需要段階別指数(国内品+輸入品)をみると、素原材料が前年比▲25.6%(7月:同▲25.5%)、中間財が前年比▲7.3%(7月:同▲7.8%)、最終財が前年比▲3.9%(7月:同▲3.8%)となった。

円高進行に伴う輸入物価の大幅な下落を受けて、素原材料が大幅なマイナスを続けており、最終財は下落基調を強めている。足もとでは原油価格が緩やかに持ち直しているものの、先行きも円高に伴う輸入物価下落の影響が素原材料、中間財を経由して最終財に波及することから、消費者物価(生鮮食品を除く総合)と関連性の高い最終消費財はマイナス圏の推移が続くとみている。



4. 先行きも国内企業物価の持ち直しは緩慢

円高による輸入物価の下落圧力が強まるなか、8月の国内企業物価は原油価格の持ち直しを主因に、7月から下落幅を幾分縮小している。ただし、前月比(夏季電力料金引き上げの影響を除く)では3ヵ月連続でマイナスとなっており、物価の下落基調は継続している。

先行きは原油価格の持ち直しを主因に、為替・海外市況連動型や電力・都市ガス・水道の下落幅が縮小することから、前年比でみた国内企業物価は下げ幅を縮小することが見込まれる。ただし、依然として円高基調が続いていること、中国の過剰供給を背景に鉄鋼や非鉄金属が軟調に推移していることから、国内企業物価の持ち直しは緩やかにとどまるだろう。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。